

第7章

人と自然の関わり

人々の暮らしの移り変わり

大地の恵み

水・川の恵み

雪と暮らす

温泉と観光

1 節 人々の暮らしの移り変わり

上空から見た山ノ内町

■ 原始から中世

昔から人々の暮らしは自然とともにありました。原始の人々は植物採集、狩猟、漁労をおこない、石や土、植物、動物の毛皮などを加工して狩猟具や調理器、入れ物、衣類等を作るなどまわりにある自然を資源として巧みに利用しながら生活していました。山ノ内町には旧石器時代、縄文時代、弥生時代を通じて約50か所遺跡があり、人々の暮らし方がわかります。

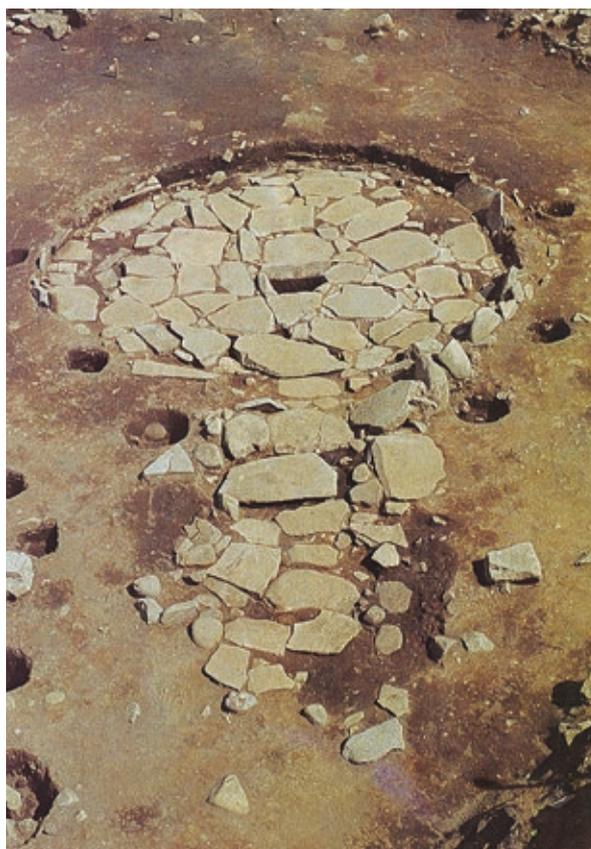
1万6千年以上前の旧石器時代の痕跡として、新湯田中や前坂で石刃（頁岩製、黒曜石製の打製石器）などの出土があります。槍などで獲物を捕らえ石刃で解体していました。

縄文時代の遺跡には、上林中道南・伊勢宮（夜間瀬本郷）・上条・島崎（沓野）・佐野などがあります。粘土を用いた土器（縄文土器）が作られ、鍋や壺として利用されました。また、石斧を使って木を倒し、炉では木を燃やして調理や暖房に利用しました。佐野遺跡（国指定史跡）は縄文晩期（約3000年前）の遺跡で、多量の土器や石鏃（石製のやじり）、獣骨（シカ・イノシシ等）が出土しています。

石製品としては石鏃・石槍・石錐・石匙・石皿・砥石・石棒などのほか、軟らかくて加工し



佐野遺跡出土の土器



伊勢宮遺跡の柄鏡形敷石住居址

やすい蠟石（滑石）を用いた勾玉などの装飾品も出土しています。伊勢宮遺跡では、住居の床に平らな石を敷きつめた柄鏡形の敷石住居址が発見されています。

弥生時代になると、水田耕作に適した低湿地で米作りが行われました。これ以後現在まで人々は堰を築いて水を引き、畔を設け、水を管理しながら米を栽培してきました。

古墳時代、古墳の築造に石が使われました。山ノ内町には10基ほどの古墳が確認されています。最大規模の東町1号墳（春日古墳）は直径21m、高さ5.6mの円墳です。東町古墳群（夜間瀬本郷）や湯宮古墳（湯田中）の内部構造は横穴

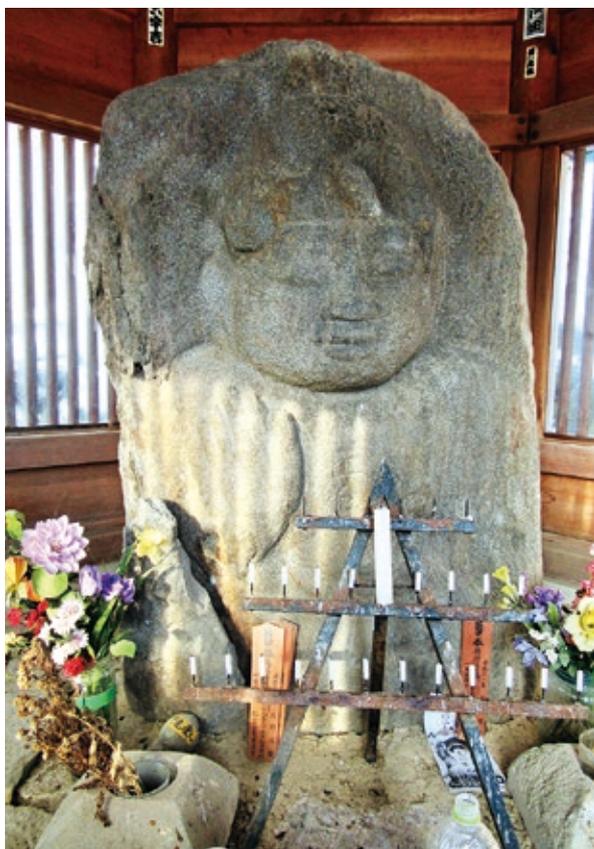


東町1号墳の内部

式石室と呼ばれ、大きな石が組みられています。石室の規模は、東町1号墳が長さ9.8m、幅3m、高さ2.8m、湯宮古墳が長さ4.7m、幅3m、高さ2mです。蓋石とよばれる平べったい大きな石もあります。

奈良時代から鎌倉時代にかけて、信濃国では天皇や貴族に馬を育て貢進する牧(御牧)が設けられました。金倉井牧は志賀高原を含む平穏・穂波地域、笠原牧北条は夜間瀬地域辺りと推定されています。

中世には、仏教の密教信仰に結びついた修験



弥勒石仏 1130年(大治5年)

道が発展しました。本尊は蔵王権現で、湯田中には蔵王権現を祀る小祠があり、金倉の弥勒石仏(大治5年=1130年の刻みあり)とともに修験者(行者、山伏)の崇敬対象であったと考えられています。高社山の奇岩、角間川の潤満滝、横湯川沿いの温泉源(地獄)や仏岩などが修行の場であったと考えられ、竜王山・五輪山・聖岩などの地名にも密教との関係性が伺えます。

山は「山の神」が住む地、あるいは神が降臨する地として信仰の対象となりました。高社山は麓地域の信仰の山となり、夜間瀬(古くは夜交と表記)では馬脊社を祀りました。岩菅山頂には湯宮神社(湯田中)と天川神社(沓野)、焼額山頂には上条神社(上条)、笠ヶ岳には佐野神社のそれぞれ奥社が祀られています。

戦国時代には、里山が山城として使われました。中野氏一族の夜交氏は、横倉集落の東側に大城、小城を築きました。東西に延びる急崖の尾根を利用し、上部には堀切や土塁を設け、頂上には帯曲輪という平坦部も設けて館を建てました。また、小島氏は菅集落の北西、更科峠近くの里山に地形を生かして山城を築きました。



夜交城山

■ 巢鷹山から御林へ

戦国時代、古来から行われていた「鷹狩」が大名の間で盛んになります。鷹狩は飼慣らした鷹(イヌワシ、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサなど)を山野に放って、鳥(鶴、雉、山鳥、鴨、鳩など)やウサギ、キツネなどを捕える狩猟で

す。江戸時代初期には、沓野山に^{すもり}巢守役という専任の監視員が任命され、鷹巣を保護し藩主に献上しました。



巢鷹山の一部をなす岩菅山

その後、巢鷹の保護・献上が廃止になると、巢守役は山見役・山改役に切り替えられ、御林(官林)の伐採場所の選定や監督、収税業務などに携わりました。松代藩領である佐野・湯田中・沓野の山林の一部は藩林となり、御用木が伐り出されました。

幕府領であった夜間瀬村では、高社山に御林が設けられていました。水害で流された橋などの修復の用材として御林の木材が使われています。

いりあいやま ^{さんろん} 入会山と山論

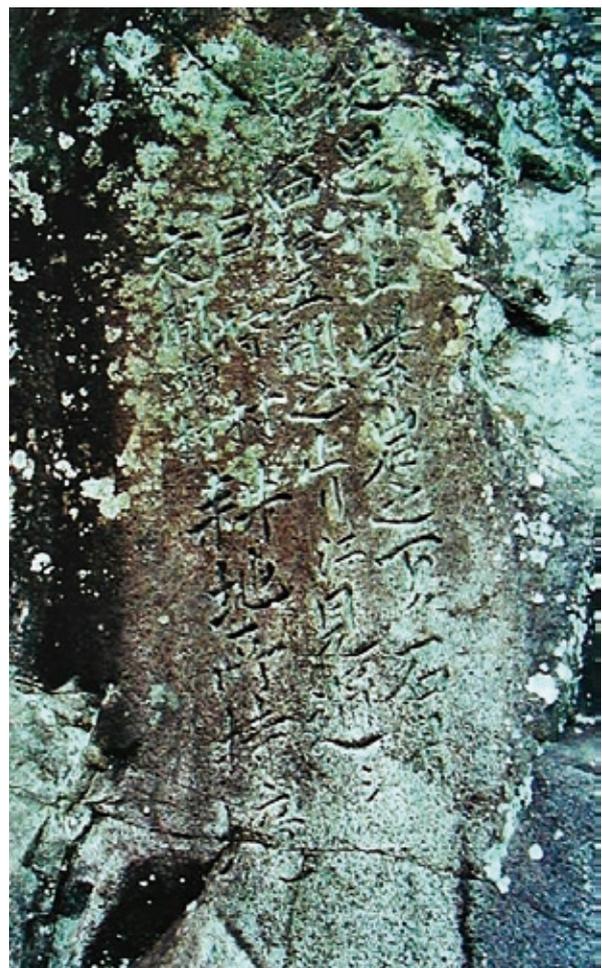
村人にとって、山野は生活に欠かせないものでした。木は煮炊き用の薪^{たきぎ}として、薪や木炭は冬場の暖房用燃料として使われました。木材は建物・家具・橋などの建築材として必要でした。屋根葺き材料として^{かや}萱場が設けられ、萱は毎年刈り取って何年か保管して使われました。草や木の葉は田畑に敷き込む「刈敷^{かりしき}」として堆肥に利用されました。農作業や運搬用に飼っていた牛馬の飼料でもありました。山菜(フキ・ワラビ・キノコなど)や木の実(クリ・トチなど)は季節ごとの食糧でした。

こうした生活に不可欠な山野でしたので、共同で利用・管理する入会山がありました。約束を設けて山林原野に入り会い、利用しました。

夜間瀬山は中野・小布施地域の35か村が入り会う共有地で、山年貢(山の税金)を負担していました。入会山の利用を巡って紛争が起こり、そのため分割して個人所有にする割山(山割)が行われた地域もあります。

山野の利用が進むと土地所有を巡って隣村との衝突が起こりました。これを山論と言います。1676年(延宝4年)には、木の伐採を巡って田中・沓野村と夜間瀬村の山論が生じました。それは幕府への訴訟に発展し、評定所で裁定を受け、上条村も含めた村境が確定しました。夜間瀬村は木島平18か村とも山論が生じて数年来の訴訟事件となり、1698年(元禄11年)に幕府評定所の裁定が下りました。

戸狩村と夜間瀬村では、1859年(安政6年)に村境を巡って紛争が起きました。これは夜間瀬川の洪水にともなう流路変動によるもので、代



戸狩村・夜間瀬村境印
「從是(これより) 川上紫岩之下夕石ヨリ
東江四拾五間之止り江見通シ
戸狩村 夜間瀬村 耕地所持境」

官所と周辺村々の仲裁によって境界が確定し、松崎尾根の2か所の岩に境印を刻んでいます。

ほかにもいくつもの山論が起きました。山野の境界は生活上重要な問題であったからです。

■恵みの大地を守る

江戸時代、住民は生活に欠かせない入会山を利用してきましたが、明治政府は入会山を官有地(官有林)に編入しました。しかし、生活上の権利を守るため、湯田中・沓野では民有引き戻し運動を展開し、1886年(明治19年)、民有地に払い下げてもらいました。ところが、明治末期になると、その民有地を町村地へ編入させるという方針が出されます。そうなれば入会団体としての管理運営機能と入会権を放棄させられるということになってしまいます。重大な危機に直面した湯田中・沓野では、1927年(昭和2年)財団法人として、湯田中は共益会、沓野は和合会を設立し、所有林野に地上権を設定し基本財

産として登記することで、この局面を乗り越えることができました。

こうして、志賀高原一帯は2つの財団法人が維持管理し、自然を守りながら利用・開発を進めることとなりました。

現在、町の広大な山林は林産資源や観光利用のほか、下流住民の飲料水・灌漑用水のための水源涵養保安林、災害防止のための土砂流出防備林としても重要な役割を果たしています。



共益会・和合会所有形態図



2節 大地の恵み

魚野川溪谷

■山と人々の暮らし

山ノ内町には豊かな山林が広がっています。生活の多くは山菜や魚とり、山仕事などの山からの恵みに支えられてきました。山の豊富な資源を利用して、炭焼き、竹細工、白箸造り、ろくろ細工が行われました。

沓野村では、1935年（昭和10年）、炭焼きで製造した木炭が102戸で2万俵、ネマガリダケ（チシマザサ）が50戸で400万本という記録があります。ネマガリダケは竹細工原料として須賀川に運ばれ、冬の副業としてざる・皿・かごなどが作られました。

白箸（白木の箸）造りは江戸時代から盛んでした。志賀高原のモミ・ツガ・トウヒなどの樹木を雪のあるうちに伐り出し乾燥させ、袋入割り箸のほか子持ち箸・楊枝箸・口細箸などに加工しました。1887年（明治20年）には100戸で1000万膳、1935年（昭和10年）には180戸で2010万膳の生産記録があります。製品は東京・名古屋・新潟・北海道などにも販売されていました。

渋や湯田中では、お土産としてろくろ細工を



竹細工（須賀川 昭和35年頃）

製造販売しました。黒柿・エンジュ・イチイ・梅などの樹木を加工し、湯飲み・茶筒・茶たく・皿・楊枝入れなどが作られました。また、地域には製材所や下駄屋ができ、木材は建築材や生活用品として利用されました。

■農作物の変遷

先人は原野を開墾して住み着き、農地を広げてきました。江戸時代には商品作物の栽培が増加し、木綿や油菜が広く栽培されました。明治時代に養蚕業が盛んになると桑畑が増加し、衰退してくると、桑畑はホップ・葉タバコ・果樹などの畑に転換されていきます。

昭和40年代に入ると、国の助成による農業構造改善事業が始まりました。土地区画整備事業により、それまでの変形で小さい土地は重機で大規模に改変され、長方形で広い土地に区画されました。農道や用水路も整備されました。高社山腹ではアカマツ林がブドウ団地に変わりました。ちょうど国の米余りによる生産調整・減反政策が重なり、田地は果樹園（リンゴ、モモ、



炭焼き小屋（潤満滝展望所 平成21年）



りんご園(夜間瀬 平成30年)

ブドウ)や野菜畑(アスパラ、メロン等)に大きく転換されていきました。現在は日本を代表する北信果樹地帯の一角を形成しています。

■大地の恵みを探る

西洋科学を学んだ松代藩士佐久間象山(1811～1864)は、藩財政の建て直しのため利用掛を命じられました。象山は砲術を習い、蘭学を学び、西洋科学の知識が豊富でした。また経済開発に先見性をもっていました。1848年(嘉永元年)6月、象山は領内の沓野・湯田中・佐野村で地域調査を行い、さまざまな資源を発見し、地域開発にあたりました。

鉱物資源については、沓野村の石膏・石墨・御影石・石塩・鉛・銅・紫斑蠟石、湯田中村の白堊(石灰岩の一種。チョークの原料)、佐野村の蠟石、硫酸重土(黄鉄鉱)などを藩に報告しています。さらに角間川溪谷で蠟石、白根山で硫黄、魚野川溪谷で金鉱・銀鉱を発見しました。硫黄は火薬の原料となりました。

林産資源の活用としては、志賀高原一帯の木材の伐採と越後への売却、シラビソ・ウラジロモミなどからの樹脂採取、地域へ杉・ヒノキ・カラマツ・サワラの植林を推奨しました。植林された杉は「象山杉」として後世にもつながっています。

地域開発としては、薬用人参の栽培奨励、山ブドウからのブドウ酒造り、牧草を利用した養豚計画のほか、温泉湯治客の尿尿や農家床下の

土を利用した硝石製造も行っています。ジャガイモの試作による、十二沢・沓打・池の平(丸池付近)・平床への開拓入植も計画しました。

これらは彼が学んだ百科全書「ショメール」や化学書「カステレン」を応用したものでした。また、角間・沓・湯田中・安代の温泉成分を分析し、温泉の保護に深い関心を寄せています。



象山杉(佐野 令和2年)

■鉱山

金倉・角間・佐野に蠟石・滑石の鉱山がありました。蠟石と滑石は生成過程や成分の違いがありますが、いずれも蠟燭のような質感・光沢を持った軟らかい石です。はんこや石筆(学校等で使われた鉛筆状の筆記具)、耐火材、薬品、製紙などに使われ、現在はガラス繊維の材料として広く利用されています。原始時代には勾玉が作られました。

金倉鉱山は1919年(大正8年)に採掘を始め、索道を設け、湯田中駅から貨車で運んでいました。1949年(昭和24年)のキティ台風の打撃を受け、1954年(昭和29年)に閉山しました。角間鉱山は1930年(昭和5年)に発見され、戦時中は軍需省指定の鉱山となりました。佐野鉱山は1953年(昭和28年)に群馬県の業者が採掘を始めました。

前坂集落の東に連なる横峰では石材(輝石安山岩)を産出していました。1904年(明治37年)に切石600切、野面石500個、1916年(大正5年)に切石1500切、野面石1200個の記録があります。

沓野日記

沓野日記は1848年(嘉永元年)、佐久間象山が松代藩士として、藩領の沓野、佐野、湯田中の三村の利用係として赴任した時に書いた日記です。日付の後に、「朝76度(摂氏24度)、昼80度(摂氏27度)」



佐久間象山(真田宝物館提供)

と気温を華氏と摂氏で書くなど西洋学研究を生かしています。岩菅山登山では大いに感激し、「岩菅山を祭る」(沓野山祭文)を記しています。

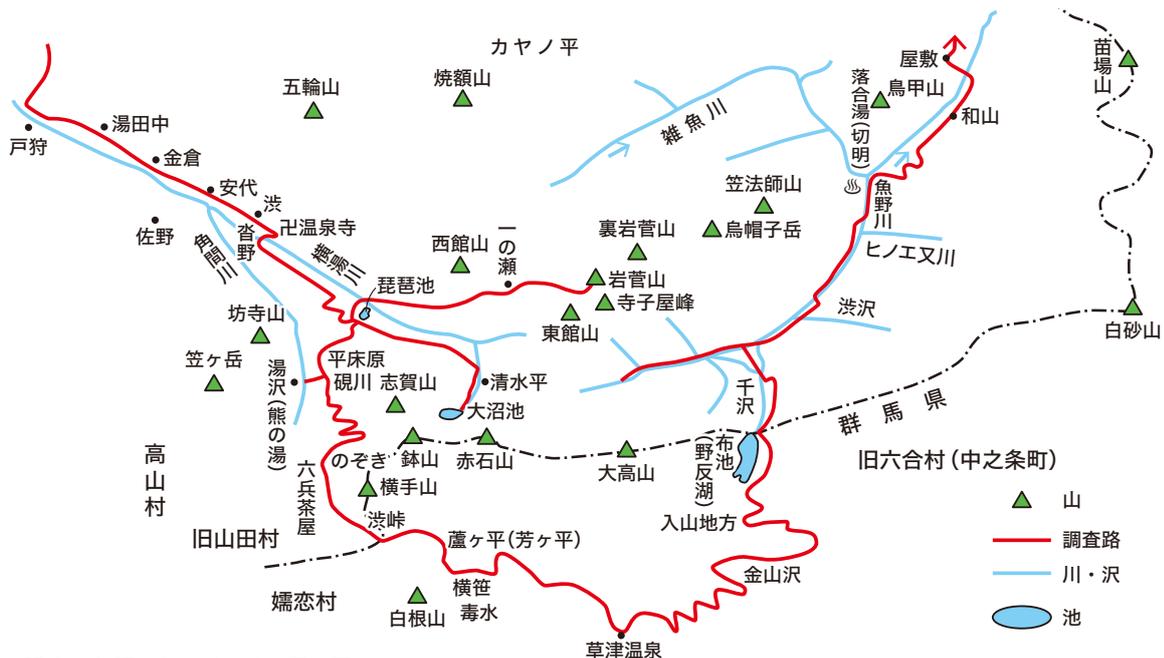
湯田中から秋山郷への調査では、温泉寺を出発し沓打、一沼、平常(平床)、硯川と進みました。硯川では温泉が溪流の中に湧出しているのを見て、流れを移して湧出する温泉を独立させ、後には湯治場となると語りました。横笹を過ぎた所で「毒水」の表示のある水を口に含み、硫酸が水に混じっていると考察しています。草津の宿泊を経て、布池(野反湖)

を通り、千沢をくだり魚野川との合流点に達すると、鉱石を探しながら魚野川をさかのぼりました。しなの木の皮で覆った小屋に泊まりながらの調査でした。イワナやフキのおいしさに感動しています。その後、魚野川を下り秋山を目指します。ある者が藩に銅が出ると申し出た十二沢という所では、象山は銅鉱が出るような所ではないと語り、採集させたサンプルを見て硫化鉄の類で銅は採れないと看破しています。薬師堂の近くでは昔、代官が試掘した銅山があるという山の形を見て、調べる必要もないと判断しています。

前年の地震で山崩れが起き流れがせき止められた所(切明付近)では、現場を見て図を作成し、温泉宿の主人にお金を渡し、すぐ工事に取りかかるよう指示しています。

切明の後、和山、屋敷を通り、新潟県の中子を経て野沢峠、野沢温泉、安田(現飯山市)、越(現中野市)の音高寺から湯田中へと戻りました。

象山が調査で歩いた道は、現在、野反湖から渋沢ダム、東電水平道、切明と魚野川渓谷沿いに歩く登山道と重なっており、新緑や紅葉の素晴らしい景観が楽しめます。



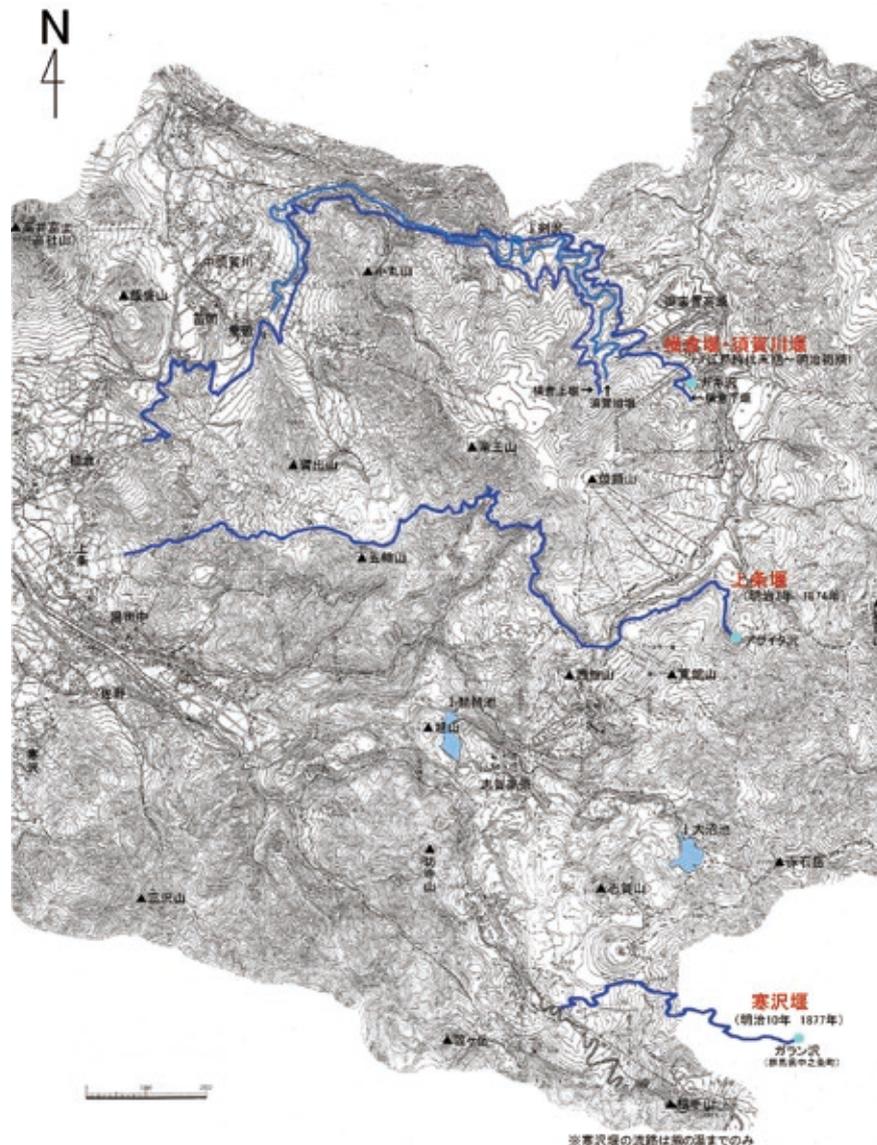
佐久間象山が調査したルート(概念図)

3節 水・川の恵み

横倉堰・須賀川堰を学ぶ

■ 水論と分水嶺を越えた堰

どの集落にも堰(用水路)があり、春には堰揚げや堰筋の刈払い作業の姿を見かけます。水なしで生活を営むことはできません。先人は原野を開拓し、生活用水や田用水として水を引き、その堰沿いに集落を成立・発展させていきました



山ノ内町の主な堰

た。とりわけ戦国時代が終わって世の中が落ち着いてくると、水田開発が盛んになりました。豊かな生活を稲作に求めたのです。山ノ内町域では江戸から明治時代にかけて30以上の堰が築かれています。

水田には水が不可欠ですが、引水によって下流域では水不足となります。これにより水利権

を巡って紛争「水論」が頻発しました。夜間瀬川の水利に関わる水論の初見は、中野地域の八か村(現八ヶ郷水利組合)と金井村(中野市)のものでした。幕府評定所の判決によって夜間瀬川の水利が八か村に認められ、山ノ内地域における堰の新規開発は困難となりました。また樽川の水利も下流の村々にありました。そのため夜間瀬川・樽川流域から水を引くことができず、分水嶺を越えた雑魚川等の流域から苦勞して堰を引くことになったのです。

横倉堰は上堰と下堰の総称です。上堰は江戸時代末期に横倉の坂口稔兵衛を中心とした12人が計画しました。1861年(文久元年)、大干ばつによって笹川の水が涸れ、稲も枯れ果て村は困ってしまいました。12

人は奥山を調査し、焼額山北斜面の大沢からの取水と堰道の見通しをつけました。自費で90人余りの人夫を雇い、牛3頭を買って荷物を運び、作業小屋を設け、工事を進めます。測量のほか、掛樋(木をくりぬいた樋)や隧道(トンネル)、分水場を建設しました。人夫による給料持ち逃げなどの困難を乗り越え、1864年(元治元年)、全長約23kmに及ぶ堰が完成しました。約35haの田が開かれ、約137石(玄米で約20.5トン)の米が実りました。



横倉堰の碑
(徳川慶喜題額、森鷗外撰)

1880年(明治13年)、村は再び大干ばつとなり、稲は水不足により全滅してしまいました。上堰の水のありがたさを知った人々は、今度は村を挙げて新堰の開削を行いました。これが下堰です。大沢先の裏餓鬼沢からやせ尾根下までの10.5kmを新たに掘って上堰に合流させ、1897年(明治30年)に完成しました。

須賀川堰は、永池郡左衛門ら8人が焼額山の小雑魚川から引水しようと計画した堰です。中須賀川・苗間・乗廻の三組共同で工事を行い、横倉上堰の下方に開削しました。1864年(元治元年)に着工しましたが、剣沢付近の厳しい地形にはばまれて中断となります。新たな水源を



須賀川堰石碑と水神社

十三口沢に見つけて再開し、1884年(明治17年)全長約17kmの堰が完成しました。

両堰とも毎年堰揚げや保守点検を行い、大事に維持してきました。しかし傷みが激しくなって地元だけでは維持できなくなります。そこで横倉堰と須賀川堰は2堰を一つにし、国や県の力を借りてパイプラインを通すことにしました。1994年(平成6年)に完成し、横倉・須賀川の水田だけでなく、夜間瀬の果樹園や畑地にも水が送られ、全体で331haが潤いました。また、山ノ内町北部・西部地区の上水道水源や、消火栓・防除用水(消毒用)としても利用されています。西部地区の園地には自動でスプリンクラー散水ができるシステムも造られました。



スプリンクラーの散水(夜間瀬)

上条堰は、岩菅山麓のアライタ沢から引いた堰です。新田開発のため、上条村の樋口徳平ら7人が立ち上がり、新井村(現中野市)・沓野村・湯田中村とともに工事を始めました。難工事と資金不足により、新井村が脱落しますが、1874年(明治7年)通水に至りました。



アライタ沢 右端が上条堰の取入口



寒沢堰の跡

寒沢堰は、寒沢の鈴木澤次郎が幕末に計画・着工した堰です。鈴木は国境を越えたガラン沢（群馬県中之条町）を水源としました。強い硫化ガスに苦しめられながら工事を進めましたが、全財産を使い果たした鈴木は完成を見ずに亡くなります。その後村人たちが引き継ぎ、困難を乗り越えて1896年（明治29年）に完成を見ました。現在は堰として使われておらず、水利権は発電用水を確保するため中部電力に委譲されています。

奥山かつ深雪地における人力での堰開削は、多大な労力と資金をかけて行われました。この先人の労苦により、志賀高原の大量の雪解水や雨水は、分水嶺を越えて利用されているのです。

■生活用水と上下水道

水は生命を維持するための飲用、生活のための炊事用・洗濯用・農業用などとして欠かせません。上水道ができるまでは、飲用には井戸水や湧水等が使われ、用水路端では洗濯、釜・桶洗い、野菜洗いなどの姿が日常でした。用水路には水車やバッテリー（唐臼。シーソー型の脱穀・

製粉機）が設置され、米や麦などを脱穀・製粉していました。

上水道の敷設は、1931年（昭和6年）の佐野水道に始まり、1938年（昭和13年）の東部水道、1940年（昭和15年）の角間水道と続きました。佐野水道の起こりは、飲用水が原因となって伝染病がまん延したことによります。他地域でも生活用水を通じて伝染病が広がりました。上水道は1955年（昭和30年）の町合併頃から急速に整備され、1962年（昭和37年）4月には普及率が64.1%、1969年（昭和44年）4月には85.5%に至りました。昭和30年代に入り観光客が年間100万人を越える状況になると飲用水・使用水が不足し、金倉・弥勒や志賀高原に水道施設が新設されました。

上水道の普及とともに、廃水処理が必要になります。家庭には簡易浄化槽が設置されましたが、用水路に排水された汚水は環境悪化を進行させ、近年になって尿尿処理を兼ねた下水道が整備されていきました。シジミ貝やホタルが棲んでいた用水路の再生が期待されています。



南部浄水場（上が旧、下が現）



4節 雪と暮らす

立春に行われる上林不動尊 千駄焼き

■雪と日常生活

雪は生活の支障にも恵みにもなります。昔から雪に対応した生活が行われてきました。

雪が降る前には雪囲い(冬囲い)が必要です。雪から庭木を守るため、木材や板で囲み、縄で固定します。雪の多い須賀川などでは、窓ガラスの外側に板をはめます。雪が吹き込まないように玄関外側を覆う家もあります。旧北小学校では鉄棒の横棒を外しました。雪が締まる際に引っ張る力は鉄棒さえ曲げてしまうのです。

雪が降ると道や屋根の除雪が必要です。重労働ですし、除雪機等の費用もかかります。屋根の雪下ろしには危険が伴います。自然落下式屋根などの住宅も増えてきました。雪をとかす池「たね池」を設けている家もあります。除雪車による道路除雪が始まる昭和中期以前は、雪踏み(道踏み)をし、通学路や生活路を確保していました。



たね池

雪は「室(雪室)」^{むろ}として野菜の保存に役立ちます。野菜を土の中に埋め、雪で覆われると春まで鮮度が保たれ、甘くおいしくなります。春

先には、雪を早くとかすために畑に灰を蒔く姿も見られます。

子どもたちにとって雪遊びは楽しみです。スキーの発展とともに、学校ではクロスカントリースキーやアルペンスキー教室が行われています。



四小学校クロスカントリースキー大会

■スキー産業の発展

1911年(明治44年)に日本に伝わったスキーは、またたく間に各地に普及しました。山ノ内町でも戦前からスキークラブ結成やスキー大会開催があり、スキー熱が高まりました。雪や雪山・雪野をスポーツとして楽しむという生活スタイルが広まっていったのです。

志賀高原では、1946年(昭和21年)にアメリカ進駐軍が日本初のスキーリフトを丸池に建設しました。昭和30年代からはスキーリフトやゴンドラ等が続々と建設され、日本最大級のスキーリゾート地としてにぎわっていきます。1980～1981年(昭和55～56年)の冬には400万人を越えるスキー客が訪れました。スキー修

学旅行も増え、2000年（平成12年）には関東以西の20都府県から20万人を記録しています。多雪で標高の高い志賀高原では、半年にわたって滑走ができ、1・2月頃の低温期にはサラサラなパウダースノーによる滑走を楽しめる魅力があります。



熊の湯スキー場

北志賀高原でも昭和30年代から竜王・小丸山・高井富士・夜間瀬等のスキー場がオープンし、民宿やホテル、食堂、土産物店などの開店とともに住民の暮らしが大きく変わっていきま



竜王ロープウェイ
雲海や新緑、紅葉が広がる。中央は高社山

コラム

念願の長野冬季オリンピック・パラリンピック



長野冬季オリンピック1998（男子回転 焼額山）

1998年（平成10年）には長野冬季オリンピック・パラリンピックが開催されました。志賀高原と上林でアルペンスキー（大回転・回転など）、スノーボード（ハーフパイプなど）の競技が実施されました。山ノ内町では冬季オリンピック招致運動を戦前、戦後と行っていたので、この開催は三度目の正直による念願の夢の実現だったのです。

5節 温泉と観光

渋温泉

■温泉と街道

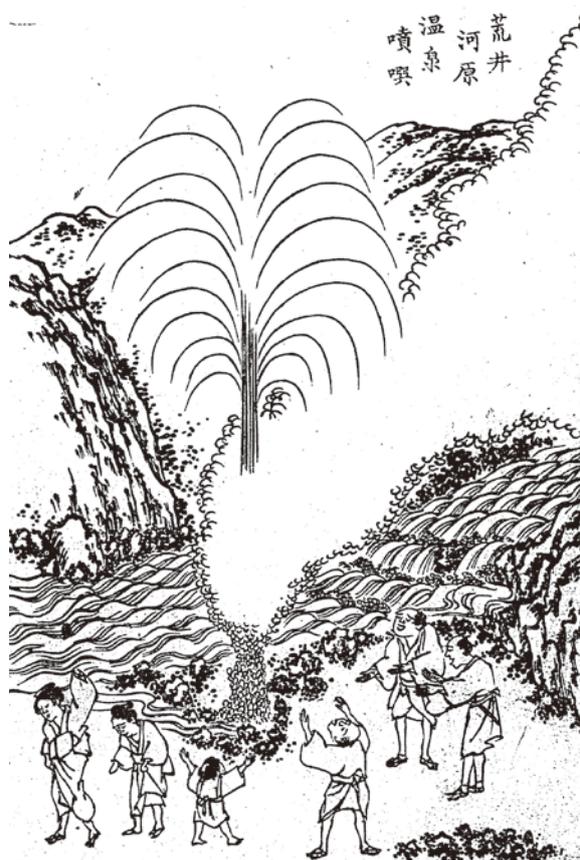
湯田中温泉と渋温泉は奈良時代、角間温泉は室町時代に僧によって発見されたという伝説があります。湯田中という地名も田の中から湯が湧くことに由来するともいわれています。山ノ内町は高温の温泉が多いことで有名です。江戸時代には松代の殿様が温泉を訪れ、一日おきに湯を城まで運ぶように命じたことがありました。また飯山の殿様が来湯した道は「湯街道」の名で伝わっています。

草津道は、中野・湯田中・佐野・沓野から渋峠を越え芳ヶ平を抜けて草津村、入山村（群馬県）に至る道筋です。江戸時代には善光寺と草津温泉、さらには前橋や江戸への近道として人の往来、物資の流通が盛んになりました。

この道は標高約2170mの渋峠を越える険しい道です。道中の無事を祈り、三十三の観音が建立されています（1819年（文政2年））。江戸時代末には5か所に茶屋がありました。

東日本有数の温泉地とも言われた草津温泉には山ノ内方面から多くの生活物資が運ばれまし

た。米・油・酒・醤油・野菜・魚・木綿などです。一方、草津方面からは下駄・柄杓・箸などの木製品、割竹・硫黄・茶などが運ばれました。宇木などでは、運ばれた硫黄を地元のアカマツ材



荒井河原（現地獄谷）の大噴泉 『信濃奇勝録』



峠の三十三観音



つけんば（付け木 着火剤）



昭和12年のパンフレット『長野電鉄沿線御案内』（長野県立歴史館蔵）

の薄板に塗って「つけんぱ」（付け木 着火剤）を生産しました。

輸送を受け持ったのは沓野・湯田中・佐野の農民で、飼っている「手牛」を使って荷を運びました。草津道は険しい道ゆえに「牛道」でした。

草津と善光寺の間に位置する山ノ内の温泉地も発展しました。地獄谷の大噴泉は江戸時代から名所となっていました。

■観光開発

北佐久郡志賀村（現佐久市）に生まれた神津藤平（1871～1960）は、慶應義塾で福沢諭吉に経済学・経営学を学び、実業家、政治家として活躍しました。高井郡の温泉や志賀高原の自然に魅力を感じた神津は、鉄道を敷き、首都圏の観光客を温泉地やスキー場に呼び寄せようと観光開発を進めました。

1920年（大正9年）に河東電鉄（現長野電鉄）

株式会社を設立し、1927年（昭和2年）には湯田中まで鉄道を敷設し、湯田中と上林には遊園地をオープンさせました。上林温泉遊園地には、温泉プールや万人風呂、テニスコート、球技室、食堂などを設け、通年で誘客を図りました。自身で命名した志賀高原の観光開発にも情熱を注ぎます。草津道（前橋街道）を改修してバス路線を延長し、スキー場やスキーツアーコースを整備し、地元の人々と手を携えながら、首都圏の人々を自然あふれる山ノ内に誘客してきました。

1930年（昭和5年）になると、全国の風光明媚な地に外国人を誘致するために国策ホテルが建設されます。1937年（昭和12年）に建てられた志賀高原ホテル（現志賀高原歴史記念館）もその一つです。ドイツ人の指導で造られたホテルは山小屋風ですが、ステンドグラスと日本画など日本文化と西洋文化を融合させようとした箇所が随所に見られます。



志賀高原ホテル(現志賀高原歴史記念館)

戦後は進駐軍が多く訪れ、その要望に応える形で丸池スキー場に日本初となるリフトが架設されました。日本初の冬季オリンピックメダリストである猪谷千春も、この地でスキーに励みました。

1949年(昭和24年)には志賀高原が上信越高原国立公園に指定されます。観光開発にあたり、和合会ではホテルと索道会社の設立・運営を会員に限定すると同時に、環境庁と共同で「志賀高原集団施設地区取扱要領」を策定し、開発行為を制限しました。共益会は森林資源の保護育成に力を入れ植林を進めました。また豊かな自然を保全しながら、町外との連携により、地域の観光資源の活用と地域の活性化を図ろうと焼額山開発を進めました。

1965年(昭和40年)、志賀高原から草津まで志賀草津高原ルート(現国道292号)が開通しました。国道の中では日本一標高の高いところ(2172m)を通る道路でもあり、人気の観光道路となっています。



日本国道最高地点(渋峠)

■楽しむ・学ぶ・つながる志賀高原へ

火山地形を基盤にした志賀高原には、森林と多くの湖沼・山々が広がり、四季折々にすばらしい景観を見せてくれます。スキーなどウィンターシーズンはもちろん、グリーンシーズンでは20あまりの変化に富むトレッキングコースがあり、自然を楽しむことができます。歩きながら自然環境や生物多様性を学ぶ環境学習も行われています。フェイスブックやインスタグラムで発信し、国内、国外の多くの人とつながることができます。



四十八池湿原と志賀山



地獄谷野猿公苑のノーモンキー

参考文献

1. 山ノ内町誌刊行会(1973)山ノ内町誌
2. 北条浩・上村正名編著(1994)志賀高原と佐久間象山, 201p. 財団法人和合会
3. 財団法人和合会(1975他)和合会の歴史
4. 一般財団法人 自然公園財団(2018)国立公園 No.769